

かみゆたたら  
六

~13  
4269  
6



13  
9269  
6

物草太郎卷之六



第十一回

狂士卧茅舎試人

知縣獵原野放鷹



龍の塔下にあつた個魚帳と偲ふ其上天の時にかつて  
雲気起し雨と降る豈旧時の魚帳と向しの人か  
櫻のその神霊を以てこの道は東山道信濃國筑上郡  
あつた此郷に一個の時人あり蓬頭垢白して  
もよく其出處未曆とも知らず常に俗に  
とて入傭歩ゆく人食を乞ふに嘆くわが  
もゆく夜を懸鶴以身にまはす背に藁衣の寸刻

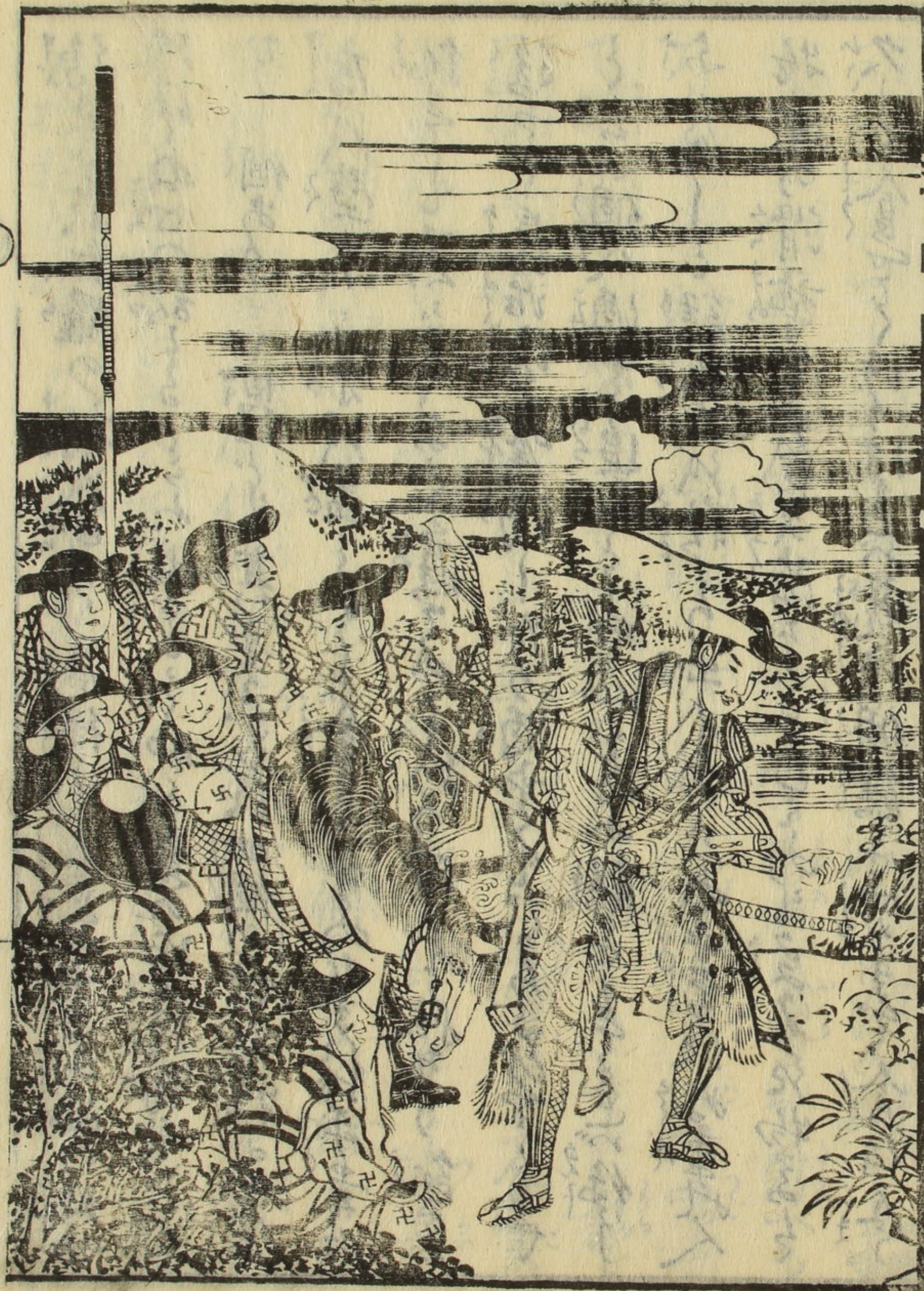
本林  
義夫氏

61.12  
20.14

91-2151

こゝにまゝにまゝとゆめとく人まを辨るるがごとく其とあり  
庭ととも竹四個の柱とて其席をまゝ四面をまゝの朝とて  
その中に休臥とて時あつて人飲食のあつてまゝ四五の  
糧を給ふもまゝに飢るる色もあつて何中も没分曉とて其  
誦と恒言のやゝに調唇弄舌ありまゝとて詠人集が白痴  
光景のまゝにまゝ物草と綽名づけしつゝに個海子とて  
よく秋まゝとてりしと自ら物草太郎秀筆と號するあふ  
と此人をその那のあふ寐とのまゝありけりまゝとてまゝ物草頭  
拾く世の中に寐るるまゝとて案とてりし物とてあふ寝るるが  
ほつてくまゝとてまゝに個人まゝに個とてりし滑種とて

漢子もわとも備と何評いふあるまゝありまゝとてりしつゝ  
まゝ物草太郎鼻のまゝとてりしつゝとてりしつゝとてりしつゝ  
すあゝ柔様の居宅の四下に崇墉高く筑あれたる門とてり  
まゝ東南西北に溝渠めぐり其中に宮殿樓閣の真のまゝとてり  
あゝあ天の御雲廊虹橋空に架し珠簾金鉤日下映し  
てまゝとてりしつゝ庭際まゝ玉屑は布て砂とてりしつゝ假水まゝ  
の仙鳥を移し四まゝの花弁を植へ春の梅櫻の爛熳とてり  
風景は天津乙女が霞裳羽衣の舞曲に春陽の長とてりしつゝ  
こゝ秋の菊の花のまゝとてりしつゝ詩歌の風流を振る酒境の  
高興はまゝに平常に數百人の侍女們まゝ個個のあつてまゝ



務まらぬ紅羅の袂に曳く扈後へ食家中之山海の珍味  
代はぬ心の欲するもいふに倣ふに如く意のゆるがせに  
なり個ありて思ふも其のこころに四箇の竹に柱を藁  
席に壁を茅に蓋をふく食家なるなりて平常に  
飢ももてんぶくも病もいふゆへに食をけり飽  
後をく長活況は喉湯にたり酒をくたまはるむりや  
と云ふ個人酒を追ひてやんて酒を飲むも飽  
ふかゆくと飽ふては吐き出しおのまふ平素に好菓人  
物草の滑靴昔もは笑落をくもいふもまらぬ物も  
久しく食をくゆへは飽は乾地個飽を四かまで食ひ今

一子に喫せしむる尋思をゆへに多く喫ふは後の物なり  
と思て食をば後のなすけあり又人の東西は嗜むを  
たぐやして飽をく飽のよは極く鼻液を流すも  
て湿り頭を戴きてて乾要に偶々たらすに飽を  
道側へ失落するが物草台所へ起つて承ん耐煩より人の素  
ざるまらぬもいふに嘔吐をくもやんののと飽をく節杖  
少く大鳥は遂にひあぐりてありける子個をりは終く知  
縣新野左衛門尉信賴故鷹の歸路後士們五六十個は  
とて久青鷹をくもて遊行くは物草大郎飽をく頭  
を拾起く喰くと信賴を月け喰ひあると飽のさむいぬ

とつて賜ひ給ふと信朝馬の害を捕く即堂に渠を  
いれるよめを伺ひては渠を物草太郎とて白痴の乞見  
申さむと境攬して總司の人と云ふ信頼馬はとめ去  
んとて物草太郎大騒して個態を馬より下りて  
彼の容易くは彼做くえざる御情をのめく急懸して  
彼より後争でる國郡に経済をやりて居れば世にのま  
きとて秋のこし思ひお顔目の人おもありとて胡盧は  
このお勢の親隨の仕立よりは圓く競舌を白め殺牙踢  
倒して痛打さんと二個の仕立左きり物草を郎と申さる  
左側は跳躍して捉住んとてらに當即身体縛縛らる

とてまどく更にお働作を以て只偶人と一船ありて眼鏡の  
轉のこり物草太郎とて面看もやうで没分曉くは流の  
おとて信頼耳をとりてて後を聴く六十餘州郡國  
中宣元義士憶精忠暫時龍劔藏豊獄紫氣猶  
懸照帝宮とて詩をりてて信頼守思にて是は庸の  
あは又二個の仕立身体をみりあり居らとてとて必  
奇異なり子細をみりめとせば馬より跳下てての態を  
とらぬがは掃淨く物草太郎が取よとて你的おと  
さ勢よとてとてとて遊る一とて物草を郎と申さ  
がとて受て早く已解まるとて疾回とて又二個の士

も鏡智<sup>ゆづん</sup>なり〜とも後<sup>のち</sup>く聖<sup>せい</sup>の自由<sup>じゆう</sup>を得たり〜六一首<sup>しゅう</sup>よ奇<sup>き</sup>  
異<sup>ぎ</sup>の思<sup>し</sup>ひもぬ〜宋<sup>そう</sup>の言<sup>ことば</sup>をいふとてあるも  
信<sup>のぶ</sup>頼<sup>らい</sup>物<sup>もの</sup>草<sup>くさ</sup>太<sup>たい</sup>即<sup>とく</sup>は向<sup>むか</sup>ひ你<sup>なんぢ</sup>いふふ幹<sup>かん</sup>をよ〜何<sup>なに</sup>幹<sup>かん</sup>食<sup>じき</sup>を  
こぞとあはれ又<sup>また</sup>物<sup>もの</sup>を所<sup>ところ</sup>が白人<sup>びやくにん</sup>良<sup>よ</sup>法<sup>ほう</sup>をいふまじし響<sup>ひび</sup>のあは  
ぶまじりも食<sup>じき</sup>すも事<sup>こと</sup>なり〜又<sup>また</sup>我<sup>われ</sup>人<sup>ひと</sup>事<sup>こと</sup>に懶<sup>あや</sup>うねぶとて  
きく只<sup>ただ</sup>藤<sup>ふじ</sup>ののこありはるをりとも信<sup>のぶ</sup>頼<sup>らい</sup>が白<sup>しろ</sup>くも便<sup>べん</sup>は  
地<sup>ち</sup>もも子<sup>こ</sup>ぬに田<sup>の</sup>代<sup>しろ</sup>も耕<sup>か</sup>けり〜とあふをうりあはれはるも  
よのさ〜と云<sup>い</sup>う錢<sup>ぜに</sup>ももあふぬは高<sup>たか</sup>買<sup>かひ</sup>の業<sup>わざ</sup>はか  
世<sup>よ</sup>と継<sup>つぎ</sup>ぎ〜とありはるも耐<sup>たい</sup>煩<sup>はん</sup>をり思<sup>し</sup>ひもよ〜後<sup>のち</sup>  
小<sup>せう</sup>信<sup>のぶ</sup>頼<sup>らい</sup>何<sup>なに</sup>の思<sup>し</sup>ひも〜人<sup>ひと</sup>領<sup>りやう</sup>地<sup>ち</sup>全<sup>ぜん</sup>民<sup>みん</sup>下<sup>げ</sup>〜物<sup>もの</sup>草<sup>くさ</sup>太<sup>たい</sup>即<sup>とく</sup>は

の能<sup>の</sup>両<sup>りやう</sup>田<sup>でん</sup>〜酒<sup>しゆ</sup>一<sup>いつ</sup>回<sup>かい</sup>日<sup>にち</sup>とにばらぬ〜とありはる猶<sup>なほ</sup>了<sup>りやう</sup>秋<sup>あき</sup>民<sup>たみ</sup>はる  
るる瓜<sup>うり</sup>圃<sup>ぼ</sup>〜苗<sup>めい</sup>得<sup>とく</sup>る金<sup>かね</sup>をり〜とありはる知<sup>ち</sup>縣<sup>けん</sup>の分<sup>ぶん</sup>付<sup>つけ</sup>と云  
〜更<sup>さら</sup>信<sup>のぶ</sup>頼<sup>らい</sup>と聖<sup>せい</sup>賢<sup>けん</sup>の道<sup>みち</sup>よろ〜國<sup>くに</sup>の政<sup>せい</sup>事<sup>じ</sup>移<sup>うつ</sup>る〜民<sup>たみ</sup>を  
帝<sup>てい</sup>のあはれ〜そりう徳<sup>とく</sup>のふ其<sup>その</sup>德<sup>とく</sup>澤<sup>とく</sup>〜浴<sup>よく</sup>〜仁<sup>にん</sup>息<sup>そく</sup>の石<sup>いし</sup>とて  
えん〜まじりはるまもよ〜む〜其<sup>その</sup>金<sup>かね</sup>にたがふ〜船<sup>ふね</sup>く日<sup>にち</sup>と  
以<sup>もつ</sup>物<sup>もの</sup>草<sup>くさ</sup>を即<sup>とく</sup>は酒<sup>しゆ</sup>食<sup>じき</sup>法<sup>ほう</sup>おる〜とありはる却<sup>かへ</sup>て信<sup>のぶ</sup>頼<sup>らい</sup>を物<sup>もの</sup>草<sup>くさ</sup>太<sup>たい</sup>  
即<sup>とく</sup>は痴<sup>ち</sup>小<sup>せう</sup>似<sup>に</sup>〜物<sup>もの</sup>をいふとて察<sup>さつ</sup>〜思<sup>し</sup>ひもよ〜とありはる也<sup>なり</sup>  
登<sup>のぼ</sup>る幕<sup>まくら</sup>法<sup>ほふ</sup>〜法<sup>ほふ</sup>の糞<sup>ふん</sup>を〜法<sup>ほふ</sup>齋<sup>さい</sup>を〜行<sup>ぎやう</sup>厨<sup>ちゆう</sup>を〜出<sup>だ</sup>す  
士<sup>し</sup>卒<sup>そつ</sup>は搗<sup>う</sup>ひま〜と皂<sup>そう</sup>隸<sup>りき</sup>と命<sup>いのち</sup>〜と酒<sup>しゆ</sup>肉<sup>にく</sup>は物<sup>もの</sup>草<sup>くさ</sup>を即<sup>とく</sup>は  
美<sup>み</sup>〜と物<sup>もの</sup>草<sup>くさ</sup>を即<sup>とく</sup>は〜とありはる〜とありはる〜とありはる肥<sup>ひ</sup>將<sup>じやう</sup>





起まき 酒肉と喫し 鬼隼又杯とく 独酌んも興  
ふし 氷下俱み飲ぶし 一ふ百結し 夜も垢るふ  
し 唾吐く去んするに 物草太郎 こそと喚し 光  
你思し 老翁み物草太郎が 云はる 今日美酒佳者  
只なる 報しき 信濃申斐の 二個 国氏進ぶし  
字どし ぞあし 鬼隼とおどし 絶倒し 又喚ひ  
し とうふし 白痴たる 思し 物草太郎 即言  
し 代告し 信相し 物草太郎 の 達頭垢面  
て 燈燵と 穿口先備の こと 吐く ぞも 其骨格

神筋の 凡し ぶふふと 鼓撃し 馬も 跨り 物草  
が 鷲屋 至り 見し 酒は 沈酔し 駒も 地を 熟  
睡より 左側する 藁包より 紫の 氣起し ひと 代  
信賴 信じて 近居み 是を 奪て 未だ 人命 謹鎮  
て 近く こんで 尻けん ずる ぬ 呀と 一發 倒し 外  
響き 物草 去り 即目と 醒し 又 伸し 打暖 ぶ  
し 代見 見たり 一個の 土お 廻り 光景 見  
し 任們 我と 疵 浮し 備の ぶし せ  
し 藁包 採ん ずる 我は 愈り 疵 浮し  
して 藁葉 包代 取し 戴し 忽ち 息ぬ ぬ 入

あつく正氣はれたふり物草を即き信賴の心頭を  
察して

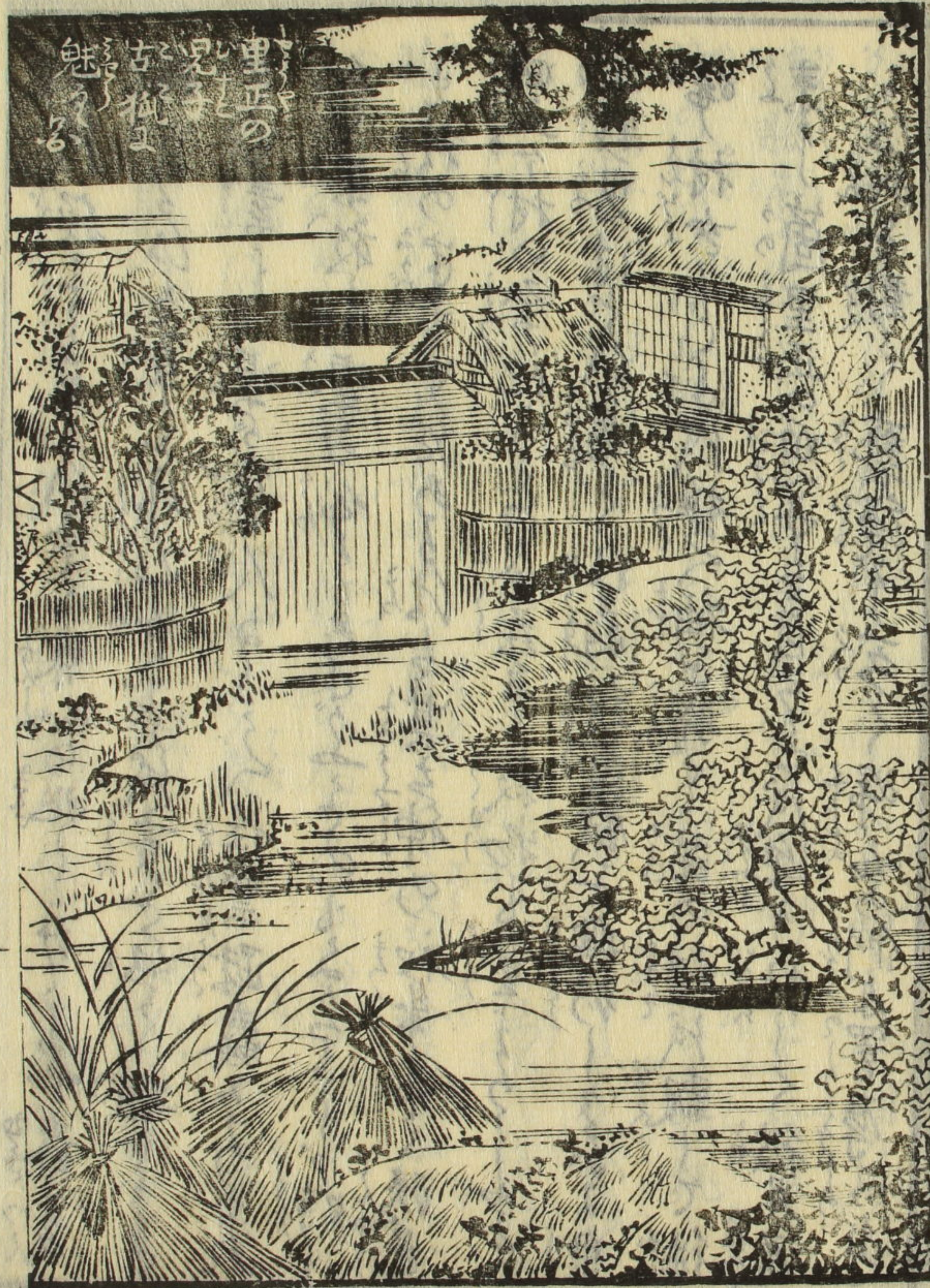
欲知に裡事 黑夜 獨來時

少朗吟とふ信賴其意と察し其天曉とま  
く宣夜も及ぐ微行く物草を即鶉屋ひまり  
と道多物草太郎一個の匣に裡より一卷の軸と出  
し示り信賴と道見とくとも代思のよ小遣  
とくく血押とさくさくおれさふくさく此事と  
知ることの如く信賴の親隨のすふとくふふふと  
ゆるるなり信賴とくさくさくさくさくさくさくさく

第十一回

魯人漁色 魅士古狐  
神器 奔靈 驅天精

夫人多萬物の靈長うとく物代級使くと物  
み制する津多た常理とくとも稟性魚純うとく  
とくく狐狸のふり魅とく物同わりの物草を即  
が居る筑摩の郡あとの郷の里正興莊と  
が二子共とくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさく成長ぬれんで救変と辯せとくさく  
めてあつとくさくさくさくさくさくさくさく  
色とり多ふ個信賴よとくさくさくさくさくさく



兼氏 後とてさるひさき春心の兆しけりや春去  
婦ありひさき草と外ひ女さる言さるけり  
さるも素より渠が魚人さるさる性稟跡森たりこれ  
き早敷く渠のさるさるものもさるさるさる  
も社のさるもさるさるはと其さ神の祀事さる  
四五ヶ村の祭祀さるさる今さるさる穀物も登りさるさる  
小駁男はさるひ集り仕舞討鼓戯と興行さるさるさる  
婦村女さるさるさる推し袖と聯り蒔の裾は飄りて往  
来り箇里正の思子と目さるさるさるさるさるさる  
さる此と對りて藝漫りさるさるさるさるさるさるさる

さるさる懐前さるさるさる思んさるさるさるさるさるさる  
さるさる後とてまさるさるさる其容止嬢娜さるさる後と揚  
柳の枝乃さるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
此唇芙蓉の雨さるさるさるさるさるさるさるさるさる  
暈りり里正は思子さるさるさるさるさるさるさるさる  
晴代福さるさるさるの女女もさるさる目威さるさるさるさる  
意望外さるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
何方も佳なきさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
陸邑某の女さるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
奉家さるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

逼り好代さんへは事の集り辱めらるる半代懼く  
叔母のふみ遊く衆人の圓る代等待んてはるるなり  
と言畢てきんともふと阻く其彼代とて挑むふみ  
少女相顔て言なく俯頭く副帯の總と搦るまの織く  
あゝ削玉くくくみ子くくくをくくく挽と搦  
小少女推拒くくくして心ごとく小應先とてめくたり  
くくく見子くくく是色中の餓鬼慮らるるくくく連城の壁  
と得るくく飛くく少女向くく我輩藥ふりくくく別  
館園亭ありて人の歩み至るる如く付の傳く少女と鴛鴦  
の合衣代をぬぐくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

代棄指た中の代いあがとあが序にまうたり人衆生  
寒くくく散序くくくく君の夢代泣びにまらん河のあ  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
西くくくくくく身にくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
燈の光隠々小林表くくくくくくくくくくくくくくくくく  
あゝくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
流くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
茅屋土室ありてくくくくくくくくくくくくくくくくくく



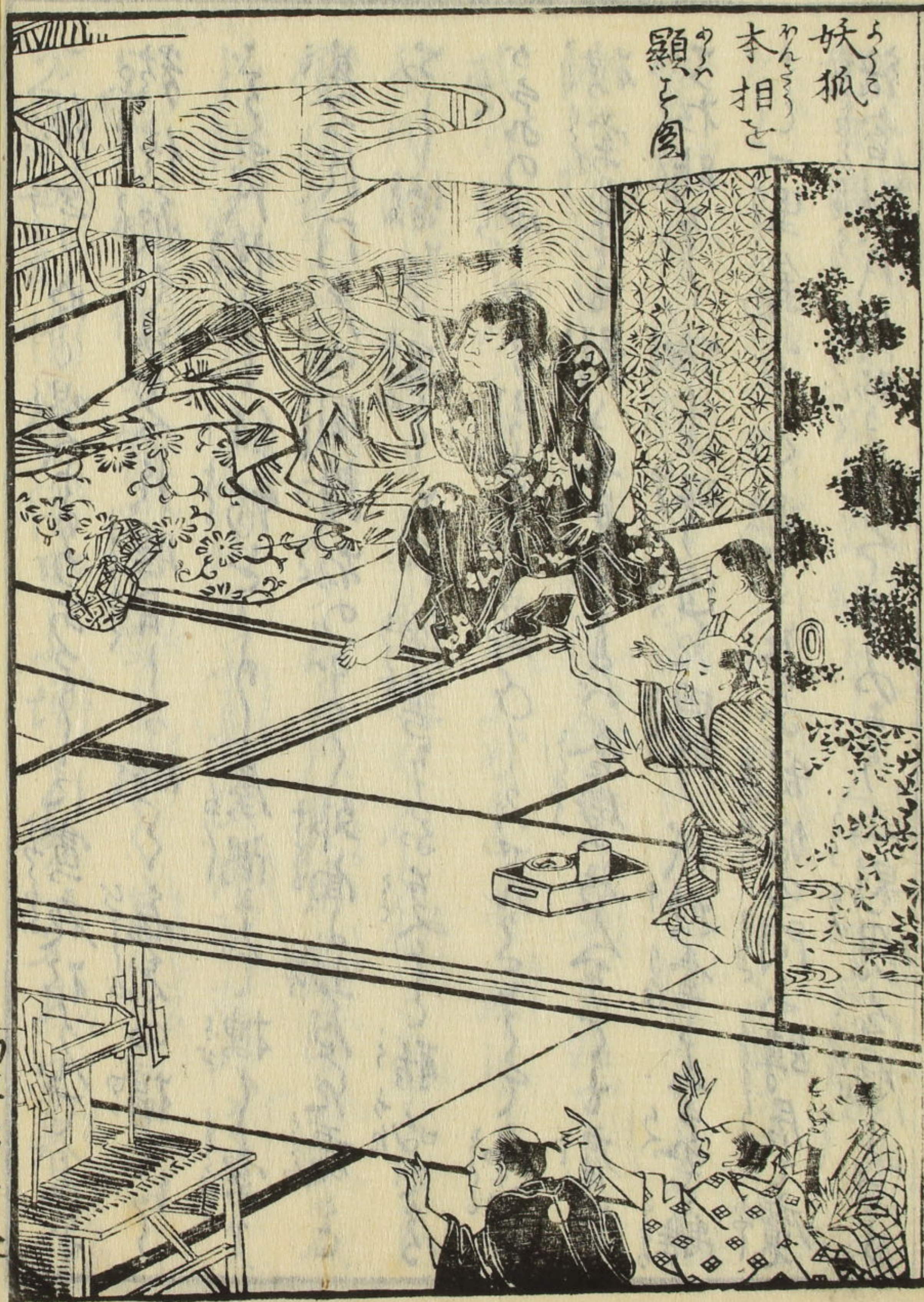
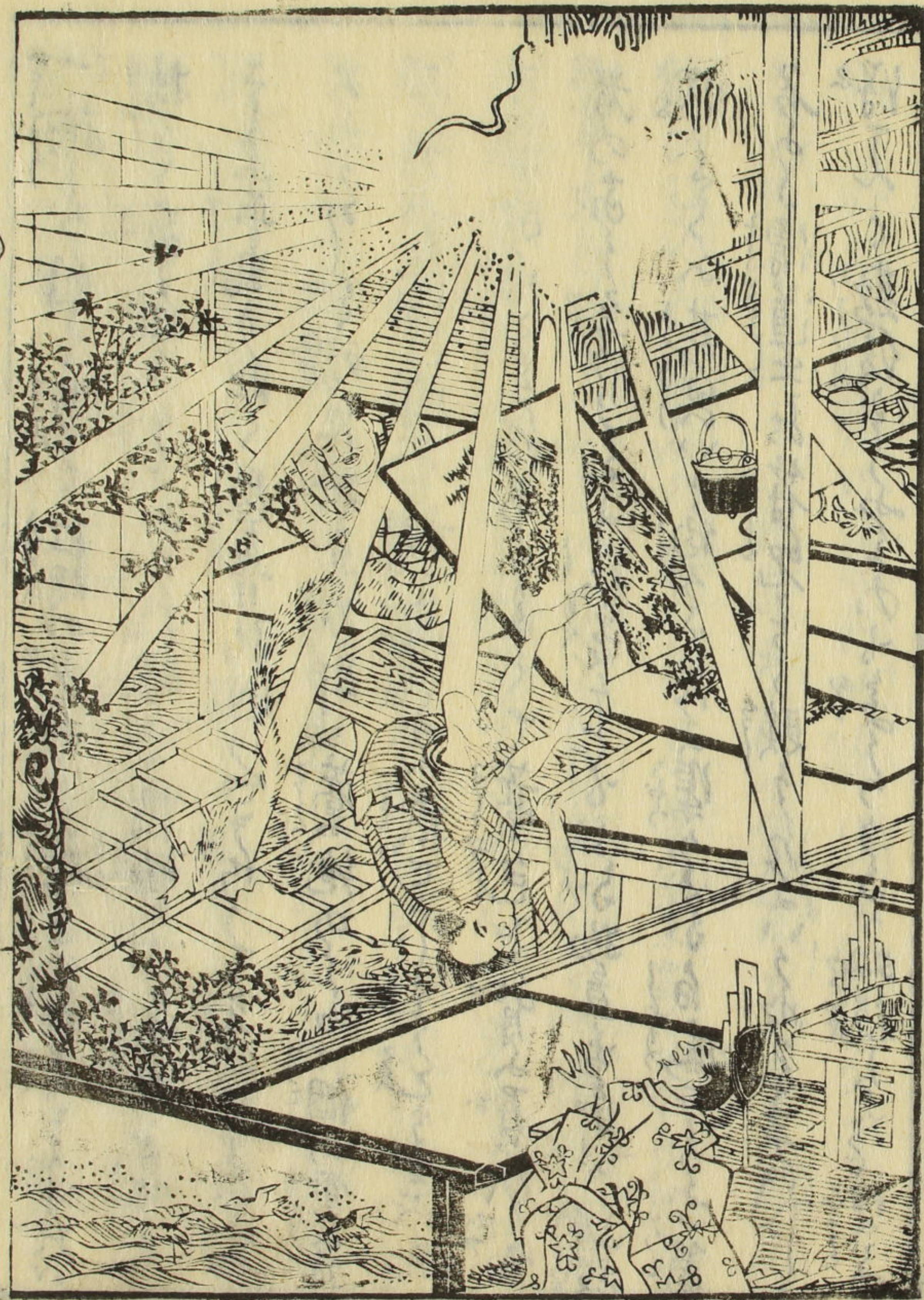
君然時茲うすこせりまきかへる裡面の模様を匂ひ  
遊くもふだうと裡面へ入るるが頃と出来り此のついで  
まゝと裡小裡面へ入る小門代用は入る膏燭明く美法  
潔くも客座より女女を扉代開くくは後まが便室  
うも六あつて他人のまゝに居た處よあはれをゆゑにふ  
休想を平人まゝにまが平素より橋下お石使ひ婢より若  
くもいづれも修削しつゝのあつて君もまゝの故あつて洩  
れらるゝのまゝに居た處よあはれをゆゑにふ  
拍くお諾くと應へて後湯とせ開き出さるるあは十二三  
果汗のりつと細細なるお力女より女女をまが力女は囁言けり

酒車代とくゆく勤待お麗人の勤めよ未盡を盡し  
て扱乃 敷代とくめりふ夜もとどね深更もまが力女  
お糸つて榻とくあ被代よりあつて都へ海へおまひ  
お玉盟ひくく曉近くけりまがたづひはあつてお別れ  
鴻の聲にお遅うとれ起おまふ女女思ひ子の往より  
てまあつてお君おあふ身代はうあまひくは入るお  
白頭のおあつてくあのおふ幸おあつてあつておは  
おはたおおる君と會へる風あつて君と離るんま  
あつてお母おあつてあはれ愛とて思ひまはれおあつて  
おあつてお母おあつてあはれ君の座へも至るだうとつておあつて

數日相住来りしと先約し人々不覺代りて  
けりしは思子體瘦し神隠れしは状を  
傳せぬを頼みて醫師代へ治せしは  
師傳とてし務療り候たり早く治せんば  
極小難いんと湯薬代あてりしは強りしは  
えん傳くに憊し老景をく人と面とありは  
婦の密室より引りて極小難い病を  
と對治せし其後ちよ多し僧とむ久遠より  
とて神傳の符呪と壁に貼し其功を  
とて毎病情魔語日多増ふが一夕其家春圍繞

て佛号如く唱へたりありしに宣夜に  
發傳被しゆりて睡目しが醒し病急の榻より  
さうあは怪しき紙燭とてし屋隅まで挿し索り  
見れば門戸の圓鎖ぬのぞり外面よむだれ處と  
あし皆ちが果しあふ後異事ふまよと聴的なる  
がその中のさかきとてくはひとて外面と  
神索とも影がふ見へしとて合壁に人かども雁ひ  
てお明をく燃し四つ迫り田野に挿しふらふと  
しし一里余ありしと異なりとて乱塚の間小蹲居て魔  
治會明は傳りありしとて小影見を隠しとて





一掃するもいざぐねの光ふよと視るべし病者なりとんば  
 持くおのりぬりたるふりた終く憔悴し病状を吐く  
 さしお正氣の如く愚直性つてまらつて見つけしは子母  
 ちあふりのし物草を所が藁絶のつら一個の靈符  
 おうとうとうと眼く類は思ふふ戴せしととくは六物  
 草を即もさすべあふりて藁絶と背負ひし物  
 者のおうするふりたるは壯者なりともいふ物草を即が  
 状くさふ其息いと物さるるは又潔くふ白癩をさふ一箇  
 名ある僧道主は符呪とて驥をたふしうぬふまはし  
 得んと敷後とてあふりたるは又親とたて思ふ

ぬいふりたるは瘡見膿を吸くも思ふのたぬりたる  
 ういと思ふたるは物草を即の靈符あつると圓く  
 飲びじ久く病者なりすは便室ふあらひたるは  
 物草を即が末たるは其見たり病者も慌帳慌符で  
 只鏡怨をさす外面上に逃去いどけた倒さるるは書  
 即正氣とてさるるは物草を即も早已我を回し  
 一物あり試し出く見るとさすて去んたるは  
 社住する善の氏賜くるとは物草を即も冷嘆く  
 利利のさるるは末たるは其見たり病者も慌帳慌符で  
 おりたるは其見たり病者も慌帳慌符で

我々庶民たるもの作何ぞも庶民たるもの如く  
して興く多損ある春の男女も物草を即ち園中  
で見しころる言と畜類あがく出くこも氏見ふ  
あまふふ古柳あつてありたりこも一齋ふ野々た  
呆として物草を即ち尾庸子くむるふ徳氏嗟嘆し  
酒者氏酒傳てこも氏贈り厚く息代漸く  
たりこも氏園傳てこも氏贈り厚く息代漸く  
つゝ瘧疾ふの異病あふ氏はこも氏  
と戴せたりこも氏物草を即ちこも氏  
こも氏一個の仁心より葉色代いこも氏

ふふ異病奇疾あふ氏ね願ひの柳裡の纏ひ  
てどどく瘧疾終は諸人歡びあつて物草葉  
とど緋名くふ是里の光棍も四五個の光  
景氏見こも氏いふこも氏葉色乃裡氏見たり  
知會あつて我ひこも氏物草を即ち即ち氏何ひ  
て箇葉色代解て見たりこも氏  
物草を即ち縛め代もこも氏運動とこも氏  
得んふ物とて悔恨し其れ氏饒怒なす  
と嗟くこも氏物草を即ち軒り勢雷の  
くねくねとせざらへ四五個の光棍も一

あ偶あいつのどくどくききききくくなりなり 知ちくくものもの眼まなこととららくくなりなり  
漸しんくく曉あけ近ちかくくなりなり 物もの草くさをを即すなはちち目め覚さ醒めくくのの之ち  
景さか成なり身みををくく大おほききししくくななりり 後のちにに 後のちにに 後のちにに

物草太郎卷之六畢

